

2016年9月10日 前橋聖書フォーラム祈り会メッセージ

イスラエルのために祈る

聖書箇所：イザヤ書19章24-25節

- 19:24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。
- 19:25 万軍の【主】は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ。わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」

1 祈り会について

1. 前橋聖書フォーラムでは、月に1回を聖書研究、もう1回は祈り会にすることを決めた。
2. 祈りは、クリスチャン生活にとって重要なものである。
 - (1) 神は、御心に沿って捧げられる祈りを用いて、御自分の計画を実行される。
 - (2) 祈りの中には、神との交わりがある。
 - (3) 共に祈り合うときは、兄弟姉妹同士の交わりもある。
3. 聖書研究と祈りは、切っても切り離すことができない関係にある。
 - (1) 聖書を学んで神を知り、神への愛を深めるほど、神に祈りたくなる。
 - (2) 神に対する愛が原動力となって、私たちに愛を行うよう促す。
 - (3) 共に交わり、祈り合うということは、聖書を知的に学ぶことと同等に大切である。

2 イスラエルのために祈る

1. 祈り会の中では、「イスラエルのために祈る」時間を設けることに決めた。
2. なぜ、イスラエルのために祈ることが大切なのか。それを考えるため、そもそもイスラエルとは何なのかを知る必要がある。
3. 創世記12:1-3：**神は、御自分と「地上のすべての民族」を繋ぐパイプ役（祭司）としてアブラムを選ばれた。**

12:1 その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。

4. 創世記12:1-3の約束は、アブラハム契約という。
 - (1) この契約は、アブラハムに約束された息子であるイサクに引き継がれた（創26:3-5）。
 - (2) また、イサクの次男ヤコブへ引き継がれた（創28:13-15）。
5. ヤコブは人生の途中で「イスラエル」という名前を与えられている（創32:28）。「イスラエル」は本来、アブラハムの孫ヤコブの名前である。
6. アブラハム契約は、ヤコブからヤコブの息子たちに引き継がれた（創28:1、歴16:15-22、Ⅱ列13:22-23、ネヘ9:7-8など）。
 - (1) このヤコブ——すなわちイスラエルの子孫たちが、「イスラエル人」である。
 - (2) 彼らは、今日では「ユダヤ人」とも呼ばれている。
 - (3) したがって、イスラエルは、神が「地上のすべての民族」に祝福を与えようとするために備えられたパイプ役なのである（創28:14）。
7. イスラエルは、神に選ばれながらも不信仰な歩みを続けた。
 - (1) ほとんどの時代、イスラエルの中でさえ本当の信仰者は少数派だった。
8. 後に完全な「パイプ役」が登場した。
 - (1) イスラエル人の中でただ一人、「人類に祝福を運ぶためのパイプ役」として完全に神の御心に適った生涯を送った人物がいる。
 - (2) その者こそが、神であり、人としてはイスラエル人として来られたイエス・キリストである。
 - (3) 今や、どんな人でも、イエスを信じることによって祝福が与えられる。
9. だが、イスラエルに対する神の計画はそれで終わりではない。
 - (1) 今なお、ほとんどのユダヤ人が彼らの救い主であるイエスを信じていない。
 - (2) もしユダヤ人が「不信仰な民族」のまま歴史が終わったら、神はアブラハム、イサク、ヤコブ、イスラエルの民に与えた祝福を守ったと言えるのだろうか。
 - (3) しかし、神は約束を守られる神である。
10. 愛に基づいたイスラエルの回復 (1)
 - (1) ローマ人への手紙11:28-29：**神の賜物と召命とは変わることがない**

11:28 彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、父祖たちのゆえに、愛されている者なのです。

11:29 神の賜物と召命とは変わることがありません。
 - (2) 大多数のユダヤ人たちは今、福音を受け入れず、「神に敵対している」。
 - (3) しかし、神が彼らの父祖（アブラハム）たちを愛して約束を与えたために、子孫のユダヤ人たちもまた、神から愛されている。

(4) パウロは、彼らが召された「パイプ役」としての「賜物と召命とは変わることが [ない]」のだと宣言している。

11. 愛に基づいたイスラエルの回復 (2)

(1) 詩篇102:13-15：いつくしみの時、国々は主に立ち返る

102:13 あなたは立ち上がり、シオンをあわれんでくださいます。今やいつくしみの時です。定めの時が来たからです。

102:14 まことに、あなたのしもべはシオンの石を愛し、シオンのちりをいつくしみます。

102:15 こうして、国々は主の御名を恐れ、地のすべての王はあなたの栄光を恐れましょう。

(2) 「シオン」とはエルサレムのことである。エルサレムはユダヤ人の心のふるさとであり、再び戻ってこられるイエスが王として君臨する都でもある（詩2:6、イザ2:2-4参照）。

(3) 神がエルサレムに愛を注ぐとき——つまりユダヤ人に愛を注ぐ「いつくしみの時」、それによって世界中の人々が神を恐れるようになる。

(4) ユダヤ人が、世界を神に立ち返らせるための「パイプ役」として、神から用いられる。

12. 他にも例はたくさんあるが、イスラエルは今でも——いや、将来に渡って、神の計画の中で重要な存在なのである。

13. では、なぜイスラエルのために祈るのか？

(1) 創世記12:3「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。」

(2) アブラハムに対する約束だが、この約束が含まれているアブラハム契約は、イスラエル民族に受け継がれた。

(3) だから、この箇所を理由にして、「イスラエルを祝福することで、私たちもまた祝福される」と言うことは正しい。

(4) しかし、私たちは「イスラエルを祝福すれば祝福される。だからイスラエルのために祈ろう」と言うべきなのだろうか。

(5) 私は、これは御利益的な動機ではないかと感じてしまう。

14. イスラエルを愛することは、隣人を愛することである。

(1) たとえば私たちが隣人を愛するのは、主が「隣人を愛せよ」と命じておられるからである。

(2) さらに、私たちの内におられる主御自身から溢れる愛によって、「隣人を愛する」という選をせざるを得なくなるからである。

(3) それをしないと良心が咎めて仕方がない。また、表面的な理由では言い表すことができない奥深いところで、どうしても選ばざるを得ない。

(4) イスラエルを愛し、イスラエルのために祈ることも同じなのではないか¹。

¹ 参照：明石清正「イスラエルを愛する」カルバリー・チャペル日本五月カンファレンス（2016年5月3日、<http://www.logos-ministries.org/blog/?p=7262>）

- (5) 神は聖書の多くの箇所で、人類を「イスラエル」とそれ以外の「異邦人」という大きな2区分で扱っておられる。そのような視点から見たとき、異邦人である我々にとって、イスラエルは隣人である。
- (6) だからこそ、私たちは「隣人」として、イスラエルを愛するべきではないか。

15. イスラエルを愛する理由は、神がイスラエルを愛しておられるからである。

- (1) 神はアブラハム契約の故に、イスラエルの信仰者だけではなく、「神に敵対している」イスラエル人をも愛しておられる。
- (2) もし私たちが神を愛しており、自らは神のしもべであると思っているならば、神が愛する者たちを愛さずにいられるだろうか？
- (3) 私たちは、上手い理由が見つからずとも、結局は「神はこの隣人を愛しておられる」という根本的なところで、隣人を愛すべき理由を見出す。
- (4) 同様に、「神がイスラエルを愛しておられる」という根本的なところで、イスラエルを愛すべき理由を見出す。
- (5) そして、イスラエルが祝福されるように、また一人でも多くのユダヤ人が救われるように、祈るのである。

3 今月の祈り課題

今年のイースターの時期に、6千人以上のエジプト人クリスチャン（コプト教徒）が巡礼のためにエルサレムを訪れた。イスラエルへの旅行はコプト教前教皇シェヌーダ 3世（1923～2012）が禁止していたが、前教皇の死後、事実上の規制はゆるやかになっている。コプト教徒巡礼者の姿は、エルサレムだけではなく、ベツレヘム、ガリラヤ湖、ヨルダン川といった場所でも見られるようになっている。彼らはエジプトのメディアによって激しく非難されているが、イスラエルとエジプトの関係が改善する可能性を秘めている。エジプト人クリスチャンとイスラエルのために祈ろう。（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ『月刊ハーベスト・タイム』2016年8月号、6頁）

1. 今月の祈りのテーマは「エジプト人のエルサレム巡礼」である。今年のイースターの時期、なんと6千人ものエジプト人クリスチャンがエルサレムを巡礼したのだそうだ。
2. イスラエルとエジプトの関係
 - (1) イスラエルとエジプトは隣国である。
 - (2) すぐ思い出されるのは出エジプト記だろう。エジプトに寄留していたユダヤ人たちは、迫害を受け、その苦しみが頂点に達したとき、神はエジプトからユダヤ人たちを連れ出された。
 - (3) それ以降、歴史を通じてエジプト人はユダヤ人と敵対関係にあった。
 - (4) 第一次中東戦争：今のイスラエルという国は1948年に独立宣言をしたが、それと同時に、アラブ人諸国がイスラエルに軍隊を進め、第一次中東戦争が勃発した。その後、第四次までの中東戦争において、エジプトはアラブ側の代表国だった。

- (5) しかし、その後、エジプトとイスラエルの両国は度重なる戦争で消耗し、遂に和平交渉を進めることにした（これは単純に言い過ぎだが、詳細を論じる時間がないため、これ以上は省略する）。最終的に、この二国は和平合意に至った²。
- (6) エジプトはアラブ人国家であるため、国内には強い反イスラエル感情もある。
- (7) しかし、このエジプト人クリスチャンたちのように、自分たちの主の聖地として、イスラエルへ巡礼に訪れる者たちが起こされはじめています。

4 将来の預言

1. イザヤ書19:24-25には、次のような将来の預言がある。

19:24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。

19:25 万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」
2. 将来、エジプトもまた国家として神に立ち返る。³
 - (1) 「その日」とあるのは、メシアが再臨し、地上に御自分の王国を立ち上げる時である。
 - (2) メシアが王として戻ってこられるとき、イスラエルは神の民として回復される。
 - (3) それと同時に、エジプトとアッシリヤ（今のイラク北部にあった王国）もまた、神から「わたしの民」と言われるようになる。
 - (4) 出エジプト記の時代以来、歴史を通じて反イスラエル国家であったエジプトもまた、国家として神に立ち返る。
 - (5) エジプトとイスラエルは並んで、「大地の真ん中で祝福を受ける」ようになる。

5 エジプト人クリスチャンたちに見る希望

1. イスラエルとエジプトとの完全な和平が実現するのは、メシアの再臨の時であり、将来のことである。

² 1978年、米国のカーター大統領を仲介役として、イスラエルとエジプトは平和条約締結を含む外交文書「キャンプ・デービッド合意書」に調印した。参照：マーティン・ギルバート『イスラエル全史』下巻、千本健一郎訳（朝日新聞出版、2010年）264-319頁

³ エジプトに関する聖書預言については以下を参照のこと。アーノルド・フルクテンバウム『聖書は千年王国について何を教えているか』2013年フルクテンバウム博士セミナーテキスト（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2013年）54-55頁；Arnold G. Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah: A Study of the Sequence of Prophetic Events*, Revised ed. (San Antonio, TX: Ariel Ministries, 2003), pp. 497-501.

2. しかし、今、エジプト人クリスチャンたちがエジプト国内のメディアから非難を受けながらも、大挙してイスラエルへ巡礼に行っている。
3. 中東和平において真の平和を実現できるのは、キリストの愛である。
 - (1) このエジプト人クリスチャンたちが同国人の非難にも屈せず巡礼を決行しているのは、おそらく、イスラエルが自分たちの神である主イエスの聖地だからという理由だろう。
 - (2) もしこのエジプト人クリスチャンたちがこのような活動を続ければ、彼らはイスラエルとエジプトの関係をさらに改善させるための掛け橋となるかもしれない。
 - (3) 彼らが可能を秘めているのは、彼らがまず主イエスを愛しているからである。
 - (4) 彼らが主イエスを愛し、その愛をもってイスラエルに向かうなら、イスラエルで一人でも多くの救われる者が起こされるチャンスとなるかもしれない。
4. 最終的な中東和平は、メシアの再臨まで実現しない。しかし、福音伝道のために祈る必要がある。
 - (1) 完全な中東和平がメシアの再臨まで実現しないことは、聖書預言から明らかである。
 - (2) しかし、今のこの時代において、**福音を伝えるために**クリスチャンがイスラエルとエジプトの掛け橋となることは重要である。
 - (3) 今、この時、一刻も早く、一人でも多くのユダヤ人やエジプト人が主に立ち返ってほしい。
 - (4) 主が愛されているユダヤ人、また将来「わたしの民」と言われることになるエジプト人が、一人でも多く主に立ち返り、今からまことの主イエス・キリストを愛してほしい。
 - (5) だからこそ、私たちはエジプト人クリスチャンのために祈らなければならない。
 - (6) 彼らが、エジプトの地で召されたクリスチャンとして、主の器として用いられるように。